

EU統合から新しい文化の創造へ 現地レポート

ベルリン発

中東欧へ向けての日本文化発信

寿司とマンガのニッポン

ベルリンでは、多くの日本文化イベントが開催されており、日本文化に強い関心を抱く人も多い。そういう方々と話をする機会が多くあるが、そうすると決まって「典型的な日本料理という」と寿司ですよね」とか、「日本のマンガはかわいい。私、マンガ大好きです」ということばが返ってくる。

その都度、日本の現状を伝え

ようという思いから、「寿司は確かに日本料理のひとつですが、高価なものなのでめつたに食べに行くことはありませんよ」、「マンガといっても、少女が主人公のかわいいものだけでなく、歴史や文学をモチーフにしたものもたくさんありますよ」と答えると、相手は少し怪訝な顔をする。こうした現象は、何もベルリンに限ったことではなく、世界的に広まりつつあることだろう。

たかはひろみつ
高羽洋充
在ドイツ日本大使館三等書記官

和食屋に限らず、韓国やベトナム、タイ料理店で寿司を食べられるところは、ベルリンだけでも100軒以上といわれており、確かに道を歩くと「SUSHI」という字とよく対面する。本屋に行くとき必ず日本のマンガ本が陳列されており、もちろんドイツ語に翻訳されている。

なるほど、寿司やマンガはベルリン市民に受け容れられている日本の大衆文化なのだと思われるが、日本全体を正しく映し出しているかという疑問を感じてしまう。とはいえ、寿司やマンガは生活の一部として受容され、商業的需要があるのだから、否定するつもりはないし、日本文化の一端がベルリン市民にも身近な存在になっていると考えれば、決して憂うべきことではない。

芸術文化の露給パランス

芸術文化面に目を向けてみよう。ベルリンでは、日本公開か

ら少し時間は経過するものの、宮崎駿監督の映画は必ずと言ってよいほど上映されている。そのほか、商業ベースで展開される日本映画もたくさんある。映画は商業として成り立ちやすい面を持つが、ドイツ側の主導で実施される映画上映は、いわば「需要」といえるだろう。

では、日本側からの「供給」がないかという点、そうでもない。ベルリンには日本人アーティストを紹介するギャラリーがいくつもあり、そこでは日本の現代美術が定期的に紹介されている。興行というよりはまだまだ紹介という趣の強い日本人映画監督特集の上映会も頻繁に開催されている。

ただ、日本以外にも世界中からアーティストが押し寄せるこのベルリンでは、小規模で開催される事業は埋もれてしまうことも多々あり、こうした供給がすぐに需要に変わる状況にはない。「そもそも需要になりにくい分野である」、「需要を求めているわけではない」ということもあるが、現代の芸術に国境がなくなりつつある今、そこに日本文化を認識することが難しい状況になってきている。

もし供給を需要に変えることを目指すのであれば、日本の独自性を示すこと、さらにはそれが日本の独自性であることを理解してもらう努力が必要だろう。とはいえず、すぐに需要に変えられないまでも、世界中からの多くの供給を受け止めるだけの下地がここベルリンには公平にあるといえる。

「JAPAN NOW」の成果

そんななか、2005年9月にベルリンの2つの小さな劇場を舞台に、今回3回目を迎える「JAPAN NOW」というイベントが開催されたので紹介しておきたい。

このイベントは、2005年



「JAPAN NOW」が開催された2つの劇場のうちの1つ、ベルリンのクンストハウス・タヘレス。連日、数多くの観客が訪れ、ドイツでの日本文化への強い関心がうかがえた

写真提供：筆者

が設けられていたこと。ここでは、ざっくりばらんな会話が繰り返され、一方通行ではない交流がみられた。個々の作品に対する評価は賛否両論あるかもしれないが、このイベントがベルリンに残した意味は大きなものがある。

そのほか、主に知的交流分野において、ベルリン日独センターの存在は特筆すべきである。同センターでは、シンポジウムや講演会を始めとして多くの事業が開催され、日独、日欧間の知的交流を促進する対話を重視している。ここでは、ベルリンからドイツ、さらには東欧に向けた事業が展開され、今後の日欧間の知的対話や文化交流の拠点として欠かすことのできない存在になるだろう。

ベルリン州政府も、芸術文化を重要視している。「首都文化財団」を設け、「首都ベルリンにふさわしい意味のある事業」に対して助成を行なっている。2005年は、138件、総額1036万ユーロ（約1億41

00万円）を助成しており、そのうち日本関連イベントは3件、計7万5000ユーロ（約1020万円）の助成を得ている。こうしたベルリン州政府の取り組みには、芸術文化を通して州の活性化に努めようとする姿勢を見て取ることができる。

ベルリンを見る限り、ドイツのなかでも日本文化の需要と供給のバランスはほどよいほうだといえるだろう。ただ、ベルリンは特殊な都市であることを忘れてはならない。旧東ドイツ地域でただ一つ突出した大都市で、今もなお発展を続けている。逆にベルリンから一歩外に出ると、日本文化に対する需要も供給も伸び率は高くはない。日本に旧東ドイツの情報があまりないのと同様に、旧東ドイツに日本の情報は十分伝わっていない。

ドレスデン、ライプツィヒといった比較的大きな都市では、日本映画祭、日本映画特集が開催されているもの、そもそも日本文化に触れる機会に乏しい現状がある。その点、ベルリ



たかは ひろみつ ●東京外国語大学欧米第一課程ドイツ語専攻卒業。研究テーマは「ドイツと日本におけるスポーツ文化比較」。1999年にジャパンファウンデーションに入り、人事課、造形美術課を経て、2005年3月より外務省に外向、現職。ベルリン及び旧東ドイツ地域における日独文化交流事業の支援を担当

ンおよび旧西ドイツ地域には、定期的にも日本文化が紹介され、観客の目も肥えており、それだけに、常に洗練されたものを紹介していく必要がある。

ベルリンから「東」へ

では、今後ベルリンにおける日本の芸術文化はどうあるべきなのだろうか？ ベルリンには、日本に限らず世界中の芸術文化を紹介する準備ができていますが、簡単に飛び込むとただ埋もれてしまうだけである。重要なことは、ベルリンはあくまでステツプという位置づけにして、終着点にしないことである。仮にベルリンで成功を取っても、ベルリンのなかだけで集約されてしまい、ドイツ全体に日本文化を紹介したことにはならない。

もちろん、旧東ドイツ地域に事業を展開する場合には、そもそも日本文化に対する知識が乏しいことから、急に現代芸術を持つていっても抵抗が大きいだろう。まずは、現地の人々のイメージの延長上にあり、かつ

今の日本を感じられるもの、規模は小さくてもよいから伝統的なもの、現代芸術であつてもどこか日本の伝統を感じられるものから紹介する必要がある。また、経済状況がよくない地域においては、大きな興行収入は期待できないため、政府および公的な文化機関が果たすべき役割は大きいと考える。

もちろん、これは旧東ドイツに限らないだろう。歴史的にも東欧の国々では、一般的に日本文化に対する知識に乏しい。ジャパンファウンデーションの大型日本文化紹介事業などによって、東欧各国の首都を中心に日本文化が広まりつつあるが、それもまだ十分とはいえないはずだ。重要なのは、日本文化の供給の下地をつくり、広げていくこと。その意味において、すでに下地が整いつつあるベルリンは、旧東ドイツ地域はもとより、東欧における下地づくりの拠点になりうる都市である。この街を經由して、多くの日本文化が広く紹介されていくことを期待したい。